囚人物語

浜谷健次郎

理論社

図書物語

灰谷健次郎

理論社

理論社の文芸書版
島物語

NDC913
四六判 20cm 590p
1999年1月初版
ISBN4-652-07169-8

作者　灰谷健次郎(はいたに・けんじろう)
神戸に生まれる。詩誌「輪」同人。児童詩誌「きりん」の編集を手伝う。17年間の小学校教師生活ののち、アジア・沖縄を歩く。1974年「兎の眼」を発表、1979年山本有三記念第一回「路傍の石」文学賞受賞。1980年から約10年、淡路島に移り住む。その後、沖縄・渡嘉敷島に拠点を移して作家活動をつづけている。主な作品に「太陽の子」「我利馬の船出」「海の図」「はるかニライ・カナイ」「せんせいけらいになれ」「島へゆく」「島で暮す」「優しさという階段」「灰谷健次郎と話す」全集版「灰谷健次郎の本」全24巻「灰谷健次郎童話館」全13巻(理論社)「ひとりぼっちの動物園」(あかね書房)「天の瞳」(角川書店)他、多数の著書がある。

作者　灰谷健次郎
画家　坪谷令子
発行　株式会社 理論社
発行者　下向 実
東京都新宿区若松町15-6
〒162-0056
電話 営業 (03)3203-5791
出版 (03)3203-2577

1999年1月第2刷発行

©1999 Kenjiro Haitani & Reiko Tsuboya Printed in Japan.
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

¥2000−

島物語

もくじ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Ⅰ はだしで走れ　5
Ⅱ 今日をけとばせ　101
Ⅲ きみからとび出せ　189
Ⅳ ほほ笑みへかけのぼれ　295
Ⅴ とべ明日へ　421

画／坪谷令子
装幀／平野甲賀

I

はだしで走れ

1

ゴンが家にもらわれてきたとき、かあちゃんは、
「かわいそうに。ほら、ふるえているわ。まだ、ほんの子どもの犬なのに親や兄弟から離されて……」
といった。
とうちゃんも、
「急に見知らぬところへやってきたんやもんなあ」
と、ゴンに同情した。
その、とうちゃんとかあちゃんが、みんなで知らない土地にひっこすという。ゴンに同情したくせに、ぼくたちをゴンのような目にあわすという。
ぼくはとうちゃんにいった。
「ぼく、行かへんで。ぼくは生まれてからずっとここに住んでるねんもんな。大人の友だちも子どもの友だちもいっぱいいてるやろ。ぼく、行かへんで」
ねえちゃんもいった。
「そんなん大人の勝手や。大人の都合で、子どもの生活を大人の考えにしたがわせるというのは、暴力や。とうさんがサラリーマンで会社の転勤でひっこすというのやったら、そらしょうがないけど、とうさんはあんまり売れないけど絵かきなんやろ」
かあちゃんはねえちゃんに、
「これ」

といって、ちょっとにらんだ。
「よけいなことといってたらごめんなさい。けど、わたしはなっとくいけへん。都会の生活から急に田舎の生活にかわるというのもむちゃくちゃや。とうさんとかあさんは大人やし、自分から決心して行くのやからええやろけど、わたしやタカぼうの身になってみィ。あばしりばんがいちもええとこや」
かあちゃんがへんな顔をして、ねえちゃんに聞いた。
「なに？　あばしりばんがいちって……」
「あばしりばんがいち知らんのん？　北海道の刑務所やんか」
かあちゃんはあきれた顔をして、ねえちゃんを見た。
腕組みをしたまま、とうちゃんはぼっそりいった。
「こないにきつい抵抗にあうとは思わなんだなあ」
「あたりまえや」
ねえちゃんは一歩も引かないという顔をしていった。
ねえちゃんとはいつもけんかばかりしているけど、きょうはほんまにたのもしい味方や。ぼくはねえちゃんを尊敬した。
「理路整然としとるなあ」
そういって、やっぱりとうちゃんは腕組みをしたままだった。
「リロセイゼンいうてなんや」
こんどはぼくがねえちゃんにたずねた。
「筋道が立っているということや」
「筋道が立ってどういうことや」

「あんた、それでも四年生？」
ねえちゃんは軽蔑したような目つきでぼくを見た。
さっき、ねえちゃんを尊敬してやったのに――。
「少しは国語の勉強をしィ。そんなことやから、いつまでたっても国語の点3なんや」
「関係ないやろ」
ぼくは腹が立ってきた。
「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥いうたんはだれや」
あら、まあ……そんなこといいましたかしら……と、ねえちゃんはすました。
腹は立つけれど、今はけんかしているばあいではないと、ぼくは自分にいい聞かせた。
「ぼく、とうちゃん好きやけど、ぼくらのいうことを聞いてくれなかったら、ぼく、とうちゃん嫌いになるで」
と、ぼくはいった。
ねえちゃんとは一時休戦することにした。
「もし、無理にひっこしするのやったら、わたし、タカぼうと二人で家出するよ」
と、ねえちゃんもいった。
うーんと、とうちゃんはうなった。
かあちゃんが、
「なんだかとうさんがかわいそうみたい」
といった。
「どうぞ。お二人はご夫婦なんですから、どうぞどうぞ仲良くしてくださいませ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と、ねえちゃんは皮肉たっぷりにいった。
「おまえさんたちの言い分はよくわかった。もうひと晩、とうさんは考えてみる。けれど、おまえさんたちもはじめにとうさんがいったことを、もういっぺんよく考えてみてくれ」
とうちゃんは真剣な顔でそういった。とうちゃんがそんな顔をしたのははじめてだ。
とうちゃんがはじめにいったことというのは、人間の生活には自然が大事だということだ。
とうちゃんは、都会に住んでいるとどんどん自然から離れていくといった。食べ物はみんな自然からの恵みものなのに、人びとはそのことを忘れて、たくさんのいのちをそまつにしているというのだ。
とうちゃんのいうことが正しいとしても、どうしてぼくたちだけが、ふべんなところで暮らさなければいけないのか、ぼくにはよくわからない。
とうちゃんは、ひとつのいのちが生きるためには、たくさんの友だちのいのちが必要なんだといった。だけど、それはべつに田舎に行かなくても、ぼくたちのまわりにはたくさんの友だちのいのちがある。
欽どん（本当は欽也くん）、カツドン（本当は勝治くん）、風太（風太くんは風太くん）、トコちゃん（本当はことえちゃん）、れーめん（本当はれい子ちゃん）と、友だちはいくらでもいる。
とうちゃんは、貧乏のくせに財産持ちやといばっていて、友だちにまさる財産はないというのがとうちゃんの口ぐせだ。ぼくはその親の子どもだから、友だちはたくさんいる。
大人の友だちは、とうちゃんと共通の友だちで、パンツ屋のおっちゃん（洋品店の主人だけれど、店番はおくさんにまかせていつもゴムのきれたパンツのようにふらふらしているのでパンツ屋のおっちゃん。パンツも売っている）、オスのれーめん（中華料理店の主人で、れい子ちゃんのおとうさん。だれにでも「おっす」と威勢よくあいさつをするので、オスのれーめん。れい子ちゃんをメスのれー

めんとよぶことがある)、ガマ口のおっちゃん(小さな本屋の主人、大きなガマ口を首からつるして集金にかけまわっている。ガマ口からお金をちょろまかしては、たこ焼きとビールを飲んでいつもおくさんに叱られている)、お留守ですのおっちゃん(園芸屋の主人で、気に入らない客がくると、お留守ですといって、なんにも売らない。子どもが三人いる。病気でおくさんをなくして、一人でがんばっている)と、いろいろ変わった人がいる。

みんな市場の友だちだ。

とうちゃんは、芸術家の友だちより、市場の友だちの方が好きやといっているけど、ぼくも同じ。芸術家の友だちの話はわかりにくくて、市場の友だちの話はわかりやすい。

とうちゃんも芸術家だから、ときどきわかりにくい話をする。

おもしろい友だちがたくさん遊びにきてくれて、家の中はいつもにぎやかなのに、都会の人間はさびしい、都会の人間はさびしいと、とうちゃんはいう。よくわからない。

とうちゃんはぼくたち子どもに反撃されて、アトリエ(アトリエといっても物置をかいぞうしただけのせまい部屋)へたいきゃくした。

少しして、また、とことこ出てきた。

「ちょっと気になることがある。おまえ今、こんどひっこししようとしている土地のことを、あばしりばんがいちというたやろ。それ、そこに住んでいる人に失礼とちゃうか」

ねえちゃんは少し考えた。そして、

「そやなあ。失礼やなあ。とりけします。ごめんなさい」

といった。

ねえちゃんはなんでも思ったことをずけずけいうかわり、自分のしたことやいったことがまちがっ

ていたと気がつくと、すぐにあやまる。
中学校では二年生なのに生徒会長をしているのは、そういういいところがあるからかもしれない。
ぼくはねえちゃんとは反対で意地っぱりだから、いつもかあちゃんに、
「ねえちゃんのツメのあかでもせんじて飲みなさい」
といわれている。
「ねえちゃんのツメのあかをせんじて飲んだら、バイキンだらけであほになる」
と言い返すけど、迫力ない。ねえちゃんがあやまったので、
「わかったら、よろし」
と、とうちゃんはいって、また、とことこアトリエへ行ってしまった。
かあちゃんはお茶を入れながら、
「こんどのこと、とうさんは思いつきでいうてはるのとちがうのやで。ずっと長いこと考えたうえでのことやさかい、あんたたちもよう考えてあげなさい」
といった。
ぼくはゴンのところへ行って、ゴンに聞いた。
「ゴン、あんた、ここと田舎とどっちがええ？」
ゴンは、
「ワン」
とほえた。
「そやろなあ。やっぱりここがええねんな。そらそうや」
ゴンは、また、

「ワン」
とほえた。
「はいはい、よくわかりました」
とぼくはゴンにウインクした。
その夜、ぼくはなかなか眠れなかった。とうちゃんに、よう考えてみてくれといわれたけど、いくら考えても、友だちと別れて知らないところに行くのは嫌だった。そうなったら、どうしようという心配ばかり大きくなった。
「ねえちゃん……」
ぼくはとなりの部屋に声をかけた。
「なんや」
「ちょっと、そっちの部屋へ行ってもええか」
「あかん。夜、女性の部屋に入ってくるのはチカンだけや」
「あほか」
けったいなねえちゃんやから、ほんとに困る。
「ほな、ここで話すけど、とうちゃんにいわれたこと考えたか」
「考えた」
「考え変わったか」
「変わらへん」
「ぼくもや。あした、とうちゃんにどういおう」
「正直に話すしかあらへん」

「それでも、とうちゃんがひっこすっていうたらどうする？」
「……」
「な。そのとき、ねえちゃんどうするねんや」
「そうなったら、パンツ屋のおっちゃんかガマ口のおっちゃんにたのんで、下宿させてもらうワ」
やっぱり、ねえちゃんはしっかりしている。
（そら、ええ考えや）
そう思ったけれど、じき心配になってきた。
「ぼくらがいっしょに行かへんかったら、とうちゃんもかあちゃんもさびしがるやろな」
「こっちもさびしいから、おあいこや」
「とうちゃんが田舎へひっこしたいというのは、とうちゃんの夢やろ」
「……」
「とうちゃんの夢をこわしたら悪いしな……」
「タカぼうの気持ちはわかるけど、なんぼ親子でも、べつべつの人間なんやから、いつかはちがう人生を歩まなあかんのや。それが、今きたというだけなんや」
「……」
「人生って、意味わかってんの？」
「それくらいわかっとるわい」
うんと大きくなって、べつべつの人生を歩むのはいいけれど、今はまだ小学生と中学生なんや。ねえちゃんはそのことわかってるのかと腹が立ってきた。
「ねえちゃんは勝手や」

「なにが勝手やの」
「なんや知らんけど、勝手やという気がするワ」
わけのわからんこといわんとって、とねえちゃんはいった。
「夏休みだけの田舎やったらええのになあ」
ぼくは昆虫のいる山や、魚のいる川を思いうかべた。

つぎの日、ぼくの心配は的中した。
とうちゃんはいった。
「きのうの夜、とうさんは真剣に考えた。そのうえで、とうさんは都会から農村へひっこしすることを決めた。反対している二人に、どう説明するかということも、いっしょうけんめい考えた。しかし、これは言葉で説明してもしょうがない。そこへ行って、いっしょに生活してもらうしかない。それはおまえたちのためだというふうにはいわない。とうさんがおまえたちに頭をさげてたのむ」
そういって、とうちゃんは、子どものぼくたちの前に、本当に頭をさげた。
ねえちゃんは、そんなとうちゃんを青い顔で見つめた。

2

欽どん、カツドン、風太、トコちゃん、れーめんと、みんなそろって、とうちゃんに交渉にきてくれた。
「おっちゃん。タカタカぼうしはぼくらの親友やねん」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com